

我が正師 小川忠太郎先生

加藤 達人

1 はじめに 日々是好日

『禅』編集部より、「小川忠太郎先生の剣道と禅にふれられた方々に、ご寄稿をいただきたい。」との有難い依頼をいただきました。私にとりまして、小川先生との出会いは、まさに命であり、先生のご指導により生かされていると感じているこの頃ですので、それほど大きな存在である先生について文章にすることは難しい課題ですが、せっかくの機会なのでお引き受けいたしました。

私は、昭和52年から、先生がお亡くなりになった平成4年まで、15年間直接ご指導をいただきました。今、日本武道修練会における講話、坐禅、古流の形（直心陰流法定の形）、剣道（竹刀稽古）などによる先生の教えを静かに振り返ってみると、「毎日毎日の生活を楽しく、安心の中に生きること」を教えていただいたように感じています。「生きている以上、毎日毎日が楽しくなければ生き甲斐はないでしょう。」というお話が印象に残っていますし、先生の辞世の句「我が胸に 剣道理念抱きしめて 死に行く今日ぞ 樂しかりける」にも表されています。現在、私にも、生きている以上、苦しいこと、つらいことは山ほどありますが、精神的には毎日が楽しく、安心の中に、先生から教えていただいた「日々是好日」にちにちこれこうにちの生活を送っています。これも先生のお陰と感謝しております。

2 出合い 正師を得ざれば学ばざるにしかず

私が初めて小川先生にお会いしたのは、昭和52年の日本農業実践学園で行われた日本武道修練会でした。この年は、私が日本農業実践学園に赴任した年で、酒井無刀先生（元日本農業実践学園職員）の勧めにより参加させていただいたのがきっかけでした。日本武道修練会の内容は、朝の坐禅に始まり、午前・午後と法定の形の修練、夕方からの竹刀稽古と一日中人間形成のための厳しい修練が1週間続けられていました。その中に、朝の坐禅の後、午前・午後の法定の形の修練の間、そして竹刀稽古の後と1日4回小川先生の講話をいただきました。私は、最初の頃は、ただただ小川先生の講話が楽しみで、この厳しい修練を続けていたような気がしています。「正師を得ざれば学ばざるにしかず」これは道元禅師のお言葉ですが、小川先生との出会いは私にとって幸福なことでした。

3 坐禅 加藤さん、1日5分でいいから坐りなさい

日本武道修練会において、小川先生の夕食だけは皆さんとは別に準備させていただいておりましたので、私は志願して先生と食事を共にさせていただきました。「1日5分でいいから坐りなさい。」というお言葉は、この夕食の際に、にこやかに先生からいただいた言葉です。



小川先生宅にて（著者左）

そして私は、この言葉を先生からの遺言と受け止めています。先生のご存命中は機会がなく、本格的な坐禅の修行はなかなか実行できませんでしたが、現在、私は毎週1回、人間禅教団の水井先生のご指

導により日本農業実践学園の柔道場において学生とともに坐禅を組んでいます。本来坐禅は剣道のためとか、功德を求めるとかそういうものではないと伺っておりました。しかし、坐禅を組んでおりますと、「何とはなしにまとわりついてくる、生きていく上での不安を洗い流してくれる。」ように感じていますし、剣道も「どなたと稽古しても楽しい。」と実感しているこの頃で、これも坐禅のお陰かと感じています。

4 直心陰流「法定の形」 命が危ういという場合でも、変わらない自己を練り上げる

先ほども触れましたが、小川先生には、日本武道修練会の最高顧問として、1週間にわたり1日4回の講話をいただきました。講話の量は相当なもので、いかに先生がこの会に心血を注いでいらしゃったかが分かります。

この講話の中で、この武道修練会に臨むに当たっての心構えとして、「この会は、修練の中心となる法定の形の「かたち」を覚えることが主ではなく、自分の中にあるものを引き出すことにあります。そのためには、正しく、真剣に修練することが大切です。」と申されました。現在の日本武道修練会も、この点を大切にしており、全力を出し切ることに主眼を置いています。

また、「法定の形」を修練する目的について、小川先生は「この形の根本は自分というものが基になっている。この形の修練により、自分以外のものに迷わされない自己をつかむこと、自分以外には迷わされないけれども、人間は情に引かされる場合もある。情にも引かされない自己をつかむこと。そして誰でも命が危ういという場合になると変わってしまう。そういう場合でも変わらない自己を練り上げることです。『武道訓』の最後、「事に臨んで心動かず事なかれ。」というところです。そのような観点から考えれば、法定の形は一生涯やっても

やり尽くせない奥の深いものがあります。」と申されました。日本武道修練会の開会式には、先生のお言葉を引用し修練会の目的をお集まりの皆さまにお話ししております。

5 剣道（竹刀稽古） 剣道は打った打たれた、勝った負けたを争うものではない

私は、心を鍛える目的で剣道を始めたわけですが、高等学校、大学と試合が多く、どうすれば試合に勝てるかをめざして稽古をするようになっており、本来の剣道とかけ離れていると感じていました。25歳の時、小川先生に出会い、表題の「剣道は勝敗を争うものではない。」とのお話しにより、方向を^{たが}違えることなく、剣道を続けることができたと感じています。

先生に稽古をお願いすると、自然とただまっすぐに打ち込むだけの「かかり稽古」になってしまい、すぐに息が上がりひどい稽古になっていましたが、夕食の際にはいつも「加藤さん、剣道の腕を上げられましたね。」と褒めて励ましていただきました。お陰で数年前、アキレス腱を痛め、激しい竹刀稽古がほとんどできずに（坐禅と法定の形だけは続けていました。）臨んだ、東京での全日本剣道連盟の昇段審査で七段をいただきました。これも、先生の言葉により方向を間違えずに進んで来ることができたお陰と思っています。

そして、先ほども触れましたが、若いときに比べ体力は衰えつつあるにもかかわらず、剣道で「どなたに稽古をお願いしても楽しい。」と実感できるのは、何よりうれしいことで、小川先生のお話と坐禅、直心陰流「法定の形」、剣道が結びつきつつあるからだと考えています。

6 杖言葉「窮 変 通」

最後に、小川先生からいただいた教えは無数にありますが、強く印象に残っていることを一つ紹介させていただきます。それは、岐阜県

の日本農業実践学園の卒業生に対して「窮すれば変ずる、変ずれば通ず」という題でお話しされたことです。

「私たちが生きていく上で、何をやってもうまくいかない、八方ふさがりの状況に陥ることは誰にもあるものです。これを窮するという。その時どうするか、どう考えるかが肝心です。あわてずにコツコツ努力を続けることです。そうすれば、周りの状態は常に変化しているわけで、必ず状況が変わり自分の進むべき道が開かれます。」さらに、先生はこのことを大自然の運行に^{たと}えて説明をされました。「9月、10月、11月とどんどん日が短くなり、夏の間は7時頃まで明るかったのが12月になると4時30分頃には暗くなる。天体の運行を知らなければ、このまま行ったら昼の時間がなくなってしまうと思うでしょう。しかし、12月22日の冬至を境にころっと状況は変わる。今度は逆に、昼の目一つずつ日が延びてゆく。大自然の運行は、ごまかしはないわけで、人生の真理もそこにあります。」とお話しいただきました。この「窮変通」のお話は、私にとりまして困難を乗り越える杖となる言葉となっています。

これからも、小川先生の心を心として修行の道を歩んでいきたいと思っています。

合掌

著者プロフィール



加藤達人

昭和26年、茨城県生まれ。東北大学大学院卒業。昭和51年より日本農業実践学園に勤務。経営部部长、農場長を経て、現在同学園学園長。剣道錬士七段。日本武道修錬会会長。人間禅附属宏道会顧問師範。